

2018 アジア大会ボート競技&2018 アジアボート連盟総会(インドネシア・パレンバン)

JARA 国際委員長
ARF 審判委員長
FISA 審判委員

千 田 隆 夫



【はじめに】

アジア競技大会は4年に一度、オリンピックとオリンピックの中間年に開催される、アジアで最大のスポーツ大会である。1951年に第1回大会がインド・ニューデリーで開催されて、今回のインドネシアのジャカルタ・パレンバンでの大会は第18回となる。インドネシアでの開催は1962年（ジャカルタ）に続いて2度目である。第18回大会は当初2019年にベトナムのハノイでの開催が決定していたが、ベトナム政府は2014年4月に大会開催を辞退し、同年9月にインドネシア・ジャカルタで2018年に開催することが決まった。

アジア競技大会はアジアオリンピック評議会（OCA）が主催する。オリンピックよりも実施競技数が多く、今大会は40競技が実施された。オリンピックで実施される競技が中心ではあるが、ソフトテニス、囲碁、シャンチー（中国象棋）、カバディ、セパ・タクロー、空手道のような、アジアの地域性を反映した、オリンピックにはない独特の競技が行われたこともある。Rowingは1982年の第9回大会（インド・ニューデリー）から毎回実施されている。

このレポートではこまごまとした審判業務は省略し、以下の2点を中心に報告する。

- 1) 新しいコース・施設でどのようにして大きなレガッタを運営していたか。
- 2) 2018 アジアボート連盟総会のトピック

【インドネシア・パレンバンの Jakabaring Rowing Course】

第18回アジア競技大会のRowingは、2018年8月19～24日に、スマトラ島南部にあるパレンバン Palembang 市近郊の Jakabaring コースで行われた。この地域一帯に、アジア大会のために新しく作られたスポーツ施設が点在している。この人工コースで昨年、アジアカップが開催されたが、コースの掘削が完了しておらず、本来のスタート予定地より約150mフィニッシュ寄りからスタートしたようだ。今回も、2,000m、6レーンは確保できたが、コースを取り囲む岸の大部分の護岸工事はほとんどできておらず（写真①）、スタートタワー（写真②）、アライナーズハット、フィニッシュタワー（写真③）の周辺一帯は茶色の地肌が露出していた。



写真①:レースの横で護岸工事が進行中(矢印)

大会は6日間で、Heatが2日、Repechageが1日、Semifinalが1日、Finalが2日。毎日第1レースは9時開始で10分間隔。RepechageとSemifinalの日は午後にもレースがあったが、その他の日は昼までにレースは終了した。天候に恵まれ、レースはすべてスケジュール通りに消化できた。



設備はまずまずだった。昨年のアジアカップの経験からか、新しいコースでつきもののブイやワイヤーのトラブルがなかったことは幸いだった。ただし、スタートシグナルシステムが不安定で、かつ、フォトフィニッシュとの連動がうまくいかず、赤旗を用いたスタートコマンド、それを無線でフィニッシュに飛ばす、という原始的方法でのぐ場面がしばしばあった(写真⑤)。

写真⑤:スタートシステムが不安定なので、赤旗は欠かせない。

今大会の審判団は以下のとおり。

President of the Jury/Committee Chair	Nation	License No.
Bing LIANG	CHN	1503
Committee Members		
KinWah SIU	HKG	1228
Takao SENDA	JPN	1230
Jury Members		
Dehai LIU	CHN	1504
Kwok Keung CHEUNG	HKG	1626
Lena MACHDALENA	INA	1293
Corres SAHUPALA	INA	1295
Krishnanad HEBLEKAR	IND	1390
Maryam KHOSRAVANIAN	IRI	1668
Dong Hoon KAY	KOR	1635
Mohd Hisham MOHD ZAIN	MAS	1277
Imtiaz Ahmad KHAN	PAK	1195
Jercyl LERIN	PHI	1493
Lasantha WELIKALA	SRI	1700
Pornthep RACHNAVY	THA	1660
Ying Hai MAO	TPE	1578
Hai Duong NGUYEN	VIE	1457
Aungthan TOE	MYA	1709

アジア大会はアジアで最上位に位置するスポーツ大会である。アジア大会に従事する審判は、経験と技量に秀でた審判をアジア各国からまんべんなく集めるべきである。その見地に立つと、今回の大会の Jury Members として日本から 2 名を推薦したにも関わらず、一人も選ばれなかったことは“異例”である。Committee Member の 2 名は審判ではなく（審判業務はしない）審判の指導に当たる立場なので別として、Jury Members の中に JPN を 1 人は入れるべきである。このような“異議 Objection”を、私は審判長の Liang BING と副会長（審判担当）の Nicholas EE に、発表後すぐに送ったが、返事は来なかった。不可解だ。

この大会期間中の ARF 総会での会長・副会長選挙の結果、ARF の体制は大きく変わって、私が Umpiring Committee の Chair となった。ARF 大会の審判の選考は、ARF Umpiring Committee の最も重要な責務である。そこには、全加盟国が納得する基準と論理と透明性がなければならない。今後の課題としたい。



⑥



⑦

写真⑥：正装した審判団。

写真⑦：アジアにも女性審判が増えてきた。喜ばしいことだ。

【大会運営】

レース運営よりも大会全体の運営の方がはるかに難しいだろう。これは開催地の経済、インフラ、宗教、民度等、様々な要因に依拠するからだ。インドネシアならではの光景を 2 つ紹介しておきたい。

インドネシアの人口は約 2 億人、世界最大のイスラム教国家である。パレンバン空港から現地 OC が手配してくれた車に乗ってホテルまで行く途中、道路という道路はバイク（自動二輪車）で埋め尽くされていた（写真⑧）。走っている車に接触するのは、と冷や冷やするほど近くを走り抜けていく。2 人乗りは当たり前で、子供を抱いて後ろに座って



⑧

写真⑧：道路を埋め尽くすバイク。子どもを抱いて後ろに乗っている女性もいた（矢印）。

る女性もいた。日本では考えられない、危険な乗り方だ！人口過密だが公共交通機関が未発達なので、こうなってしまうのだろう。

オリンピックやアジア大会レベルの大会になると、様々な行政機関が大会を支援する。私たち競技役員を運ぶ専用バスは立派で(写真⑨)、しかも白バイが先導してくれた(写真⑩)。白バイが露払いをしてくれるので、渋滞中でも比較的スムーズに目的地に着いた。



写真⑨: 役員送迎用の派手なバス。

写真⑩: 役員送迎バスを先導する白バイ。

しかし、毎週 2 回、ある曜日(教えてもらったが忘れた)の朝の決まった時間に、イスラム教の礼拝がある。その地域のほぼ全員が近くのモスクに集まって、地面に頭をこすりつけて何度もお祈りをする。だが、人が多すぎてモスクの中にはとても入り切れない。あふれた人たちは周囲の道路に座り込み、道路をふさいでしまう(写真⑪)。この時間帯にぶつかると、車はどうしようもなくなる。バスは迂回に迂回を重ねて、ふだんの何倍も時間をかけてようやくコースにたどり着いた。



写真⑪: モスク(矢印)に入りきれず、道路にあふれたイスラム教信者たち。

【FISA 審判セミナー】

前掲の大会スケジュールを見ていただくとわかるが、2日にわたって FISA 審判セミナーを実施した。レースが午前と午後の2つのセッションで構成される日、両セッションの間の待ち時間(1.5時間)とレース終了後の1~2時間を利用して、計6時間のセミナーを行った。FISAの規定では、8時間のセミナーを1回受講すると、その翌年から4年間、審判資格が延長される。セミナーを大会期間中に実施する場合は通常、レースの合間を縫って複数回に分ける。それでも規定の8時間には届かないことが多いが、足りない分は、毎朝の Jury meeting で補てんした、と見なしている。セミナーは通常、2名以上の FISA 審判委員で分担するが、ヨーロッパから遠いアジアで開催する場合、ヨーロッパの審判委員はあまりきたがらないようで、アジア担当の私1人に任されることがよくある(ホスト国がセミナー目的だけの渡航費・滞在費を出したがるらないという事情もある)。したがって、今回の私のミッションは、ARF 審判委員としてレース中の審判の“統括”と“指導”をすることと、FISA 審判委員として“審判セミナー”をすることの2つであった。

セミナーには資格更新が目的の国際審判（ITO）だけでなく、FISA ルールに基づいた国際大会での審判のやり方や考え方を学ぼうという向学心に燃えた国内審判（NTO）も多数、参加してくれた。2日連続で計6時間のセミナーを一人で担当するのはかなりタフな任務であったが、多数の参加者から多くの質問を受けて、十分な満足感を得ることができた。

インドネシアには8人のFISA審判がいる。彼らはアジアと東南アジアの大会には出てくるが、決して世界レベルのFISA大会には出てこない。せっかく世界のどの大会でも審判ができる資格を持っているのだから、積極的に海外に出かけて行って多くを学び、自国や東南アジアボート界に還元して欲しいと願う。理由は経済的な問題だけではないようだ。インドネシアボート協会の指導者層が考え方を変えるべきだと思う。

【アジアボート連盟(ARF)総会】

大会5日目の午後、ARF総会が開催された（写真⑫）。私は選手団長の長畑強化委員長とともに総会に出席した。ARFの運営サイクルはアジア大会から次のアジア大会までで、今年の総会では次期（4年間）の役員を決める選挙がある。現会長の王石（Wang Shi）氏（写真⑬）が大会直前に次期会長選挙には出馬しない、という声明を発表していた。



写真⑫:2018年ARF総会。



写真⑬:会長選に出馬しなかった
王石ARF前会長(2015~2018)。

王氏はChina Vankeという中国最大の不動産開発会社の創業者で、ARF会長就任以来、毎年大金をARFに寄付してきた。王会長就任前の2014年度のARFの年間支出は37,500米ドルだったのが、2018年度は869,772米ドルと、20倍以上に増えている。王会長の財政支援を得て、この4年間でARFはめざましい発展を遂げた。新加盟国のカンボジア、バーレーン、ネパールの3か国はいずれもARFから資金援助を受けて、Rowingに必要なボートや関連設備を整備した。ARFの主催大会としてアジアマスターズレガッタとアジアコースタル選手権が新設された。コーチ、ジュニア、パラ、トップアスリート等を対象にしたDevelopment Campが毎年アジアのどこかで開催された。2014年のARF Statutesの改訂によって、会長の再選

が1度だけ認められるようになったため、これだけの実績を挙げている王会長が再選を目指して出馬すれば、文句なしに当選すると思われていた。

王会長は出馬断念の理由を明言していないが、どうも以下の2つが原因のようだ。

- 1) China Vanke が中国企業どうしの買収合戦で失敗し、王氏自身が China Vanke の会長を辞め、経営から手を引いた。
 - 2) 王会長率いる ARF と中国ボート協会の意見が対立することが多くなった。
- というわけで、今回の会長選挙には、以下の3人が立候補した。

ARF会長(2019~2022) 候補者

番号	国	氏名	性別	生年月日	学歴	職歴・スポーツ歴
1	中国	Chen CHUNXIN	男	1966年2月25日 (52歳)	北京外国語・文化大学英語学士 北京スポーツ大学教育学博士	中国ボート協会副会長 北京オリンピックボート中国チーム監督 中国国家スポーツ委員会水上スポーツ国際部門担当 FISA国際審判 ARFレガッタ委員長 ARF審判委員長
2	タイ	Admiral Chainarong CHAROENRUK	男	1955年2月8日 (63歳)	政治学修士	タイ国王室海軍 タイ国ボート・カヌー協会会長 タイ国スポーツ庁委員 タイ国オリンピック委員会スポーツ発展委員長 ARFロウイング発展委員長
3	イラン	Vahid MORADI SHAHPAR	男	1956年11月6日 (61歳)	スポーツ科学修士	FISA Rowing-for-All Commission委員 ARF副会長 イランカヌー・ボート・セーリング協会副会長 アジア水泳連盟事務局長 イラン水泳協会会長

私をはじめ日本人で FISA、ARF の委員になっている人たちの情報では、王 石会長のバックアップを受けて中国の Chen CHUNXIN 氏が当選するだろうと予想していた。タイとイランは候補者本人というより、自国 (のボート協会) に ARF をリードしていただくだけの力量はまだない、と考えていた。

しかし、パレンバン入りした直後から、東南アジア諸国の選挙運動 (=タイの候補者に入れてくれ) が尋常でないことに私は気づいた。もちろん、他の2候補陣営にも呼び込まれて、こんこんと支援を要請されたが、東南アジア諸国の結束力には驚いた。投票結果は以下の通りで、タイの CHAROENRUK 氏 (写真⑭、⑮) が当選した。

- | | |
|------------------------------------|------|
| Chen CHUNXIN (中国) | 10 票 |
| Admiral Chainarong CHAROENRUK (タイ) | 16 票 |
| Vahid MORADI (イラン) | 2 票 |



⑭投票前に演説する CHAROENRUK 氏。



⑮ ARF 新会長に当選した Admiral Chainarong CHAROENRUK 氏。

次に行われた副会長選挙には7名が立候補した（シンガポール、香港、韓国、イラン、マレーシア、インド、ベトナム）。投票の結果は以下の通りで、次期アジア大会開催国の中国から後日推薦された1名を含めて、新副会長5名が決定した。

Nicholas EE（シンガポール）	19 票（当選）
Ho Kim Fai（香港）	19 票（当選）
Jin YONGNAM（韓国）	15 票（当選）
Vahid MORADI（イラン）	15 票（当選）
Abdul-Ghani ABDUL-MALIK（マレーシア）	13 票
Sriram VENKATRAMANAN（インド）	9 票
HaiDuong NGUYEN（ベトナム）	8 票
Duan XUAN（中国）	—（当選、次期アジア大会開催国から推薦）

ARF 総会では ARF Statutes の改訂案が承認された。以下の2点が主な改訂事項である。

- 1) Masters 委員会と Coastal 委員会を合体させて Rowing for All 委員会とする。
- 2) 各委員会の Chair は選挙で決める（ただし、来年の総会までの間、暫定的に Executive Committee が指名した Chair が務める）

総会后、ARF の新 Executive Committee（会長1+副会長5+常務理事1）は各加盟国から推薦された8つの委員会の候補者の中から、Chair（委員長）と Member（委員）を決定した。日本から推薦した以下の8名は全員当選し、ARF のすべての委員会に日本人委員が入ることになった。

Competitive Committee	Member	叶 谷 彰 宏
Development Committee	Member	堀 口 治 美
Events Committee	Member	隈 元 幸 治
Marketing Committee	Member	加 藤 直 美
Para Rowing Committee	Member	岡 本 悟
Rowing for All Committee	Member	田 畑 喜 彦
Sports Medicine Committee	Chair	日 浦 幹 夫
Umpiring Committee	Chair	千 田 隆 夫

【終わりに】

パレンバンに新しく作られた人工コースで行われた第18回アジア競技大会 Rowing は、私が見た限りでは、大きなトラブルはなく成功したと思う。コースが大会までに完成しなかったことについて、Technical delegate の Edy SUYONO は「業者が契約を守らなかった。」の一言で片づけていたが、インドネシアの国民性だとそれで許されるのかもしれない。日本で2019年世界ジュニア選手権までに海の森が完成しなかったら、大変な問題になるだろう。

それよりは、これだけ巨大なコースを作ってしまった、アジア大会後にどれ程利用するの

か、という問題の方が大きいと思う。維持費も半端ではないだろうし、インドネシアが今後国際大会を次々と誘致できるだろうか。同じことは、東京オリンピック後の海の森コースについてもいえる。戸田の全日本のレースを徐々に海の森に移すことはできるだろうが、それだけでは世論（国内、海外両方の）は許してくれない。2019, 2020 の準備だけでなく、東京オリンピック後の“レガシー”を現実問題として考え始めないといけないな、と、パレンバン巨大コースを眺めながら改めて思った。

Rowing 版東南アジア連合（ASEAN）が大国・中国を倒した ARF の劇的な体制変化は、驚くばかりである。会長選でまさかに敗北を喫した中国は、ARF には今後一切協力しない、という意思表示のつもりなのか、ARF のすべての委員会に一人も候補者をノミネートしてこなかった。今後 4 年間、アジアボート界は東南アジアが支配する。東南アジア各国はヨーロッパからコーチを招いて、競漕力もめきめき上がってきている。今大会、日本は軽量級男子ダブルスカルでかろうじて金メダルをとったが、オープン種目では中国だけでなく東南アジアにも勝てなくなっている。

2020 年、日本ボート協会は創立 100 年を迎える。この 100 年は国内普及を第 1 に考えた「漕艇・ボート」の時代だった。100 年かけて全国すべての都道府県にボート協会ができ、国内津々浦々にボートは広まった。裾野は十分広がっている。勝敗がはっきり出るスポーツでは、勝たなければ評価されないし、勝たなければ人は集まってこない。今後の 100 年は先端をより高くする、つまり強化にもっともっと力を入れて、海外で勝てる Japan Rowing を確立すべきだ。“漕艇・ボートの普及”から“強い Rowing”へ。協会の名称も“日本ロウイング協会”に変えてはどうだろうか。